The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ノーベル文学賞受賞スピーチの英日翻訳における翻訳方略に関する考察
Author(s)	長谷川, 泰子
Citation	大阪大学言語文化学. 2022, 31, p. 1-16
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/87491
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ノーベル文学賞受賞スピーチの英日翻訳における翻訳方略に関する考察[1]*

長谷川　泰子**

キーワード：翻訳シフト、翻訳方略、テクスト・タイプ

In recent years, Haruki Murakami has been often mentioned as a possible recipient of the Nobel Prize in Literature. However, in 2016, Bob Dylan, an American singer-songwriter, was awarded the literature prize. In the following year, Kazuo Ishiguro, a Japanese-born British novelist, received the prize. Their acceptance speeches were translated into Japanese and distributed via newspapers and music information websites. Introducing such authors with different cultural backgrounds as these laureates provides people with access to world literature. Translations of the speeches have an important role in the social act. This paper attempts to explore strategies for translating into Japanese from the acceptance speeches for the Nobel Prize in Literature in English. Specifically, the analysis of translation shifts occurring between the source and target texts reveals which strategies translators select to overcome differences in language, textual structure, and sociocultural context, and to achieve translation equivalence. It can also identify the purpose (skopos) of translating, target readers, and translation tendencies for the speeches, enabling comparison between translations from the newspapers and music information sites. Moreover, the acceptance speeches for the Nobel Prize are an official speech of which text type is determined depending on the contents of the speeches. The target readers are varied among the media. These factors influence the purpose of translating and determine which translation shifts or strategies to be selected by translators. The translation shifts or strategies determined by the translators are considered to have effects on the target readers. Especially, the shifts determined optionally by them are considered to have more effects on the readers than those

[1] 本稿は、第 44 回社会言語科学会研究大会の発表論文「社会文化的側面から見る翻訳シフト分析―ノーベル賞受賞スピーチの英日翻訳を事例に―」（『社会言語科学会第 44 回大会発表論文集（電子版）』2020 年 2 月 14 日発行、pp.86-89、http://conference.wdc-jp.com/jass/44/contents/common/doc/all.pdf）のデータを再分析し、発展させたものである。

* A Study of Strategies for Translating into Japanese from Acceptance Speeches for the Nobel Prize in Literature in English（HASEGAWA Hiroko）
** 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

determined inevitably by them. In this study, translation shifts are collected for the analysis from translations for the acceptance speeches by Bob Dylan and Kazuo Ishiguro. Translating the speeches is a social act of connecting target readers to world language. Further research is needed to see if these tendencies are applicable to other acceptance speeches for the Nobel Prize in Literature, and to examine factors that have effects on the target readers from the viewpoint of social aspect of translation equivalence.

1 はじめに

1.1 研究の背景、目的、意義

ここ最近、ノーベル文学賞に関する話題でよく出てくるのは村上春樹が受賞するかどうかであり、毎年、同賞を受賞するのは誰かが注目されている。そうした中、2016 年、ノーベル文学賞を受賞したのはボブ・ディラン（Bob Dylan）であった。ディランはアメリカのミュージシャン（シンガー・ソングライター）でありノーベル文学賞を受賞したと聞かれた人の中には驚いた人も多いと思われるが、同氏はシンガーとしてではなく詩人として受賞している。この出来事では、「文学とは何か？」という問いが提示された[2]と同時に、授賞発表の直後、沈黙を守っていたディランに受賞の意思があるかどうかに注目が集まった。結局ディランは辞退しなかったものの、都合により授賞式は欠席し、同氏のスピーチは在スウェーデン米国大使により代読された。そのスピーチの英日翻訳は新聞媒体のみならず、各音楽情報サイトでも公開されている。また、翌年の 2017 年に受賞したのは、カズオ・イシグロであった。同氏は 1954 年長崎生まれで、5 歳の時に両親とともに渡英した日系英国人であることから、日本の報道においても大々的に取り上げられた（日本経済新聞, 2017; 朝日新聞デジタル, 2017）。カズオ・イシグロの作品の中にはテレビドラマに翻案されたものもあり、日本でも売れている作家である。同氏は授賞式のスピーチの中で、ノーベル賞創設者がダイナマイトの発明者であること、生まれ故郷である長崎が原爆投下により壊滅的被害を受けたことに触れ、この賞の精神である「平和」と、彼がノーベル文学賞を受賞したことの意味を結びつけている。

この 20 世紀の幕開けとともに始まったノーベル文学賞は、無数の戦争や革命、紛争など時代の激動とともに歩んできた。そして、21 世紀に入りグローバル化や IT 革命が進む中、世界の様々な情報が瞬時に飛び交うようになり、ノーベル文学賞受賞スピーチ

---

[2] ディランの前年、2015 年には『チェルノブイリの祈り』で知られるウクライナとベラルーシにルーツをもつジャーナリストのスベトラーナ・アレクシェービッチが受賞しており、その時点ですでに「文学」のジャンルが従来の詩や小説、戯曲などからノンフィクションを含むものに拡大されている。その後 2016 年にはボブ・ディランが、2017 年にはカズオ・イシグロが受賞し、このあたりは非常に斬新な選考がなされた時期にあたると思われる。

の翻訳もインターネットなどを通じて広く公開されるようになった。このような歴史的背景をもち時代状況を反映しているノーベル文学賞は、上掲のように様々な文化的背景をもつ文学者に授賞されており、受賞する作家の紹介は人々が世界文学に接する入り口になると思われる。その一方で、1960年代以来盛んになってきた翻訳学が21世紀に入り、翻訳を社会文化的観点からも捉えようとする社会文化的転回を経験した今、こうしたノーベル文学賞受賞スピーチの翻訳が担う役割は大きく、社会文化的側面から具体的な翻訳テクストの言表に現れる翻訳現象を分析し、日本の目標読者に与える効果や影響を考察することは重要であると思われる。

そこで本稿では各媒体が提供しているボブ・ディランやカズオ・イシグロのノーベル文学賞受賞スピーチの英日翻訳にどのような翻訳方略が用いられているのか、どのような訳出志向があるのかを探ることを目的とする。具体的には起点テクストとそれに対応する目標テクストを比較して翻訳シフトを抽出し、語彙レベルやセンテンスレベルの言語的側面だけではなく、談話レベルやテクストレベルにおいても社会文化的側面から分析と比較を行う。この結果を踏まえてシフトが目標読者にどのような効果や影響を与えているのかについて個別に観察した後、ボブ・ディランやカズオ・イシグロのノーベル文学賞受賞スピーチの英日翻訳における訳出志向について考察し、目標読者の期待を反映させる翻訳方略の可能性について述べる。

1.2 リサーチクエスチョン

以上のことに鑑みて、3つのリサーチクエスチョンを設定する。

(1) 言語機能や目標テクストの目的、目標読者層などが、どのような翻訳シフトを生じさせているのだろうか。
(2) (1) について、各メディア（翻訳者）間でどのような違いがあるのだろうか。
(3) 翻訳者が選択した翻訳方略が目標読者に効果や影響を与えているとしたら、それはどのようなものだろうか。

2 翻訳シフトの定義

2.1 翻訳等価性理論

翻訳学において、言語学の時代と言われている1960～1970年代から「翻訳等価性」を巡る議論が盛んになり、それ以降においてもこの問題を中心に議論は展開されている。だが、「起点テクストを目標テクストに翻訳するときに起きる小さな言語的変化」（Catford, 1965; Munday, 2008/2012/2016）と定義される「翻訳シフト」は、翻訳等価性

理論の言語等価的側面を中心とした概念として扱われてきた。実際、言語間距離のかけ離れた日本語・英語間の翻訳では、等価を実現するために様々なシフトを生じさせる必要がある。そもそも「翻訳シフト」という用語を最初に使用したのはJ.C.Catford（1965）であるが、それ以降も翻訳シフト論は展開されている。たとえば、Vinay and Darbelnetは著書‘Comparative Stylistics of French and English: A Methodology for Translation’（1958/1995）の中で、一般的翻訳方略として、7つの翻訳手順（直接的翻訳・間接的翻訳）で構成された翻訳ストラテジーを同定している。同書では「翻訳シフト」という用語は使用されていないが、実際には、翻訳シフトのことを記述している（マンデイ, 2009:93）。さらに、Bulm-Kulka（2004: 290-306）はテクストの結束性と一貫性のシフトにおける明示化仮説を提唱している。翻訳者が起点テクストを解釈するプロセスが目標テクストを冗長にし、この冗長性を表現するには、目標テクストで結束性の明示度を上げることで可能となるとしている。

だが、これらは翻訳の言語面にフォーカスした等価を扱ったものであり、「静的な構造レベル、ラングレベルでの対照言語学的性格を有していること、機能・状況・文化などのコミュニケーション行為としての翻訳の特徴を等閑視していること、分析例が自ら作例した理想化されたテクストを対象にしていること」（河原, 2017:132）などの批判がなされている。

2.2 翻訳シフトの定義

翻訳シフトとは、翻訳過程で生じる変更のことである。上述のように、実際、言語間距離のかけ離れた日本語と英語の翻訳では、等価を実現するために様々なシフトを生じさせる必要がある。それに対し、翻訳過程で変わらない何らかの「不変」の部分がある。このシフトと不変という2つの概念は相互依存の関係にあり、シフトがどのように定義・分類されるかは、不変の定義と不可分である。具体的には、不変概念は翻訳前の規定的な必須条件と見るか、翻訳後の記述的概念と見るかが区別できる。前者の場合、「シフトせよ」と肯定的になるか、あるいは「シフトしてはならない」と否定的になるかのいずれかである。「シフトせよ」とされる場合は、言語体系上の相違を克服する手段として必要であると肯定される。つまり、特定の側面におけるシフトが他の側面における不変を保つのに役立つものとみなされる。「シフトしてはならない」とされる場合は、不変に保つべき起点テクスト（ST）の価値や特性を変えてしまう逸脱であり、誤訳とみなされる。一方、記述的概念としてのシフトは、翻訳行為後で記述により再構成され実証されるものである。翻訳過程の再現か目標テクスト（TT）そのものに焦点が置かれるが、この区別は必ずしも明確ではない（ライス, フェアメーア, 2019: 250）。本稿では、

記述的概念としてのシフトを扱うものとする。

3 翻訳方略とその分類について

ここではスピーチの訳出にはどのような方略があるのかを観察するために、本稿で採用する分析の枠組みについて述べる。

方略とは翻訳作業で生じる問題に対処するための方法であるが、具体的には、翻訳者が両言語間にどのような言語やテクスト体系間の差異、社会文化的差異があるかを想定した上で、どのような翻訳シフトを生じさせるか選択することである。そのため、翻訳シフトを抽出し分析することで方略を同定することが出来る。翻訳方略については、①テクスト全体を対象とした訳出志向に関する方略（Venuti, 1995 など）、②訳出における個々の問題解決のための方策（Vinay & Darbelnet, 1958/1995; Chesterman, 2016 など）に分けられる。①については、たとえば、Venuti の論考では、「異質化（foreignization）」と「受容化（domestication）」という方略が提案されている。また、②については、Vinay & Darbelnet の一般的翻訳方略（借用、語義借用、直訳、転位、調整、等価、翻案）が例として挙げられる。ただし、これらはフランス語と英語の言語間の差異から同定された方略であり、英日翻訳の事例への適用が可能であるとは必ずしも言えない。また、管見の限りでは、スピーチの英日翻訳方略を扱った先行研究は見られない。本稿では、テクスト全体の訳出志向を次章で説明する Reiss（1977/1989）が提示しているテクスト・タイプ（情報型・表現型・効力型）を分析の枠組みとし、ノーベル文学賞受賞スピーチの英日翻訳にどのような翻訳方略が用いられているのか、分析を行う。

4 ノーベル文学賞受賞スピーチとその日本語訳に関して

社会的なものである文学を対象にしているノーベル文学賞の受賞スピーチは、Reiss（1977/1989）が提示しているテクスト・タイプ（情報型・表現型・効力型）のちょうど中間に位置する “official speech”（「公式演説」）にあたると思われる。Reiss は、テクストレベルでの等価性を強調し、言語機能をテクスト・タイプと翻訳方略に結びつけている（Reiss, 1977/1989; Munday, 2008/2012/2016）。Reiss のアプローチは、Bühler の言語機能に関する 3 分類を援用しており（マンデイ, 2009; 111）、コミュニケーション重視の翻訳（Newmark, 1981）の場合だと、参考資料など情報型テクストでは内容伝達に価値が置かれ、詩など表現型テクストでは内容を類似した芸術的構成で伝えることが重要となり、広告など効力型テクストでは訴え効果を保持すること、つまり目標読者の心情に合わせた説得方略を保持することが重視される（ライス, フェアメーア, 2019: 211）。したがって、ノーベル文学賞受賞スピーチの翻訳は、これら 3 つのテクスト・タイプを

頂点とする三角形の中間に位置するのである。

さらに、ライスとフェアメーア（2019）は、翻訳等価の問題は、それぞれの文化社会における起点テクストと目標テクストの機能が不変の場合にのみ求められるものである（ibid.）としている。したがって、ノーベル文学賞受賞スピーチの英日翻訳のテクストレベルにおけるシフトの比較分析は可能であると思われる。さらに、シフトを訳出から抽出することで、翻訳の目的（スコポス）や翻訳方略（ストラテジー）を同定し、各メディア・翻訳者間の比較分析が可能となると思われる。なぜなら、翻訳者は両言語間にどのような言語やテクスト体系間の差異、社会文化的差異があるのか想定した上で、意識的あるいは無意識に翻訳シフト（翻訳方略）を選択しているため、これらの記述的概念としてのシフトを分析することによって明らかにすることが可能となるからである。また、スコポスとストラテジーの関係を考察することも可能となる。

分析に入る前に、本稿において分析対象とするボブ・ディランとカズオ・イシグロのノーベル文学賞受賞スピーチの概略を記す。

スウェーデン・ストックホルムで 2016 年 12 月 10 日にノーベル賞授賞式が開かれた。そこで、ノーベル文学賞を受賞したが式に欠席したボブ・ディランのスピーチが、在スウェーデン米国大使 Azita Raji 氏により代読された。彼はスピーチの中で、シェイクスピアと自分を重ね合わせながら、これまでの自分の音楽人生を振り返っている。スピーチは 44 文で構成されており、語彙や文法はこのようなスピーチで一般的に使用されるレベルのもので、語数は 825 語である。分析対象の英日翻訳データは、朝日新聞、日経新聞（ともに 2016 年 12 月 11 日付）、ソニーミュージック、Rolling Stone Japan[3]、BARKS[4] がそれぞれ提供している翻訳を使用する。

また、スウェーデン・ストックホルムで 2017 年 12 月 10 日にノーベル賞授賞式が開かれた。そこで、ノーベル文学賞を受賞したカズオ・イシグロが受賞スピーチを行った。長崎県出身の日系イギリス人小説家であるイシグロはスピーチの中で、ノーベル賞創設者がダイナマイトの発明者であること、生まれ故郷である長崎が原爆投下により壊滅的被害を受けたことに触れ、この賞の精神である「平和」と彼のノーベル文学賞受賞が持つ意味を結びつけている。スピーチは 22 文で構成されており、語彙や文法はこのようなスピーチで一般的に使用されるレベルのもので、語数は 432 語である。分析対象の英日翻訳データは、朝日新聞、毎日新聞がそれぞれ提供している翻訳（ともに 2017 年 12 月 11 日付）を使用する。

---

[3] 1967 年に創刊された音楽や政治、大衆文化を扱うアメリカの隔週発行の情報誌の日本版である。
[4] ジャパンミュージックネットワーク株式会社が運営する音楽情報サイトである。日本で発表されている音楽作品を邦楽・洋楽問わず紹介している。

朝日新聞、日経新聞、毎日新聞の翻訳者は、目標読者を一般の新聞購読者に設定していると思われるが、ソニーミュージック、Rolling Stone Japan、BARKS は、ディランファンや音楽ファンを目標読者に想定していると思われる。

5 シフトと翻訳方略の分析

5.1 ボブ・ディランのノーベル文学賞受賞スピーチ

まず、各メディアが提供しているボブ・ディランのスピーチの翻訳から翻訳シフトを抽出し、比較と分析を行った。はじめに「情報の付加」のシフトに着目した。これは目標読者の理解を補うために起点テクスト（ST）にはない新たな情報を追加する方略である。「情報の付加」のシフトに着目した理由は、Reiss の 3 分類のテクスト・タイプの内の「情報型テクスト」としての機能に注目したためである。該当する原文は序論に属する、5 番目のセンテンスであり、それに対応する各訳文は以下の通りである。また、目標テクスト（TT）中の下線は、シフトが観察される（情報が付加されている）箇所を示すために筆者が書き加えたものである。

ST:

From an early age, I've been familiar with and reading and absorbing the works of those who were deemed worthy of such a distinction: Kipling, Shaw, Thomas Mann, Pearl Buck, Albert Camus, Hemingway.

TT:

（日経新聞）私は幼い頃から、このような栄誉に値すると見なされた人たちの作品に親しみ、愛読し、吸収してきました。キプリングや（バーナード・）ショー、トーマス・マン、パール・バック、アルベール・カミュ、ヘミングウェーなどです。

（朝日新聞）若い頃から、キプリング（1907 年の文学賞受賞者）、ショー（25 年）、トーマス・マン（29 年）、パール・バック（38 年）、アルベール・カミュ（57 年）、ヘミングウェー（54 年）といった卓越した偉大な人々の作品に慣れ親しみ、読み、吸収してきました。

（ソニーミュージック）私は幼い頃から、（ラドヤード・）キップリング、（バーナード・）ショー、トーマス・マン、パール・バック、アルベール・カミュ、（アーネスト・）ヘミングウェイといった、そのような栄誉に相応しいと判断された人々の作品を読み、吸収してきました。

（Rolling Stone Japan）私は幼い頃から、（ラドヤード）キップリング、（バーナード）ショー、

トーマス・マン、パール・バック、アルベール・カミュ、（アーネスト）ヘミングウェイなど素晴らしい作家の作品に触れ、夢中になってのめり込みました。
（BARKS）私は幼い頃から、キップリング、ショー、トーマス・マン、パール・バック、アルベール・カミュ、ヘミングウェイなど、この栄誉に相応しいと考えられた人々の作品に慣れ親しみ、読み、吸収してきました。

以上、一般購読者が目標読者である新聞（2 件）とディランファンや音楽ファンを目標読者に設定していると思われる音楽情報サイト（3 件）の訳文であるが、朝日新聞のみ各文学賞受賞者の受賞年が原文にはない情報として付加されている。また、朝日新聞は他のセンテンスでも数字情報（ノーベル文学賞の該当者がなかった年であり、ディランが生まれた年、つまり 1941 年）が原文にない情報として付加されている。また、音楽情報サイト 2 件（ソニーミュージック、Rolling Stone Japan）では、原文でファーストネームやミドルネームが省略されている受賞者すべてにファーストネームやミドルネームが付加されているのに対し、日経新聞では、1925 年の受賞者「ショー」のみミドルネームが付加されている。また音楽情報サイトの BARKS のみ情報は付加されず、原文の情報に対し逐語的に訳出されている。
「情報の付加」のシフトは原文にない情報を訳文で付加しているため、言語体系上の相違を克服する手段として必要とされる義務的なシフトとは異なり、翻訳者の判断による任意的なシフトであると思われる。したがって、付加されている情報の内容から、各翻訳者がどのような情報を目標読者に与えるべきと考えているかが窺える。このことから、朝日新聞はノーベル文学賞受賞年を重要な情報と捉え、提供していると思われる。
これに対し、同じ媒体である日経新聞では、ノーベル文学賞受賞年ではなく、1925 年の受賞者「ショー」のみミドルネームが付加されており、原文でファーストネームやミドルネームが省略されている他の受賞者（キプリングとヘミングウェイ）にはファーストネームなどが付加されていない。これは、日本の新聞購読者の間でもキプリングやヘミングウェイはそれぞれ「キプリング」、「ヘミングウェイ」と呼ばれるのが一般的でファーストネームなどを付加する必要はないが、戯曲で受賞したアイルランド人文学者の「バーナード・ショー」は、日本では、ミドルネームの「バーナード」を補った方がより理解されやすいと翻訳者により判断されたためと思われる。またこれは、英語と日本語の姓名の表記の違いに起因するものだと思われる。さらに朝日新聞で原文にない情報（ノーベル文学賞の該当者がなかった年でありディランが生まれた年、つまり 1941 年）が付加されていたセンテンスでは、日経新聞でも「（注・1940 ～ 43 年は文学賞受賞者がいなかった）」という補足情報として訳文の最後に付加されている。新聞の主たる目

的は情報提供であると思われるが、翻訳を通じて目標読者に与えられる情報は新聞（あるいは翻訳者）により異なり、目標読者に与えられる効果も異なるだろう。

また、音楽情報サイト２件（ソニーミュージック、Rolling Stone Japan）では、原文でファーストネームなどが省略されている受賞者すべてにファーストネームやミドルネームが付加されており、BARKS のみ、ファーストネームなどを含めた原文にはない情報は付加されていない。ディランファンや音楽ファンを目標読者に設定していると思われる音楽情報サイトであるが、ソニーミュージックと Rolling Stone Japan においては、文学に馴染みのない読者の理解を補うために必要な情報であると翻訳者により判断されたためと思われる。

テクスト全体において、「情報の付加」のシフト（注釈、括弧を使用した説明書き、修飾部など）が観察されたセンテンス数と付加された情報の内容は以下の通りである。なお、ファーストネームやノーベル文学賞受賞年の情報の付加は、情報内容項目の「補足」に含めた。また、「補足」の横の括弧内の数字は出現回数である。

日経新聞 :	4	補足（2)、注釈、修飾部
朝日新聞 :	3	補足（2)、括弧を使用した説明書き、修飾部
ソニーミュージック :	4	補足（2)、注釈、修飾部
Rolling Stone Japan:	2	補足、修飾部、
BARKS:	0	

朝日新聞については、１文内に２項目（補足と修飾部）が観察されたセンテンスが含まれているため、情報内容項目延べ数「4」に対してセンテンス数は「3」となる。

スピーチ全体が 44 文で構成されており、BARKS を除き、「情報の付加」のシフトが観察された文が占める割合は１割未満に止まり多いとは言えないが、後述するカズオ・イシグロのスピーチには「情報の付加」は観察されなかったことを踏まえると、ボブ・ディランのスピーチは内容伝達に価値が置かれる「情報型テクスト」寄りのテクスト・タイプに属すると思われる。情報内容についても、英語と日本語の姓名の表記の違いや文学に馴染みのない音楽ファンも視野に入れた社会文化的差異を克服するためのシフト（方略）が翻訳者により選択され、目標読者の理解を補う効果があると思われる。また、各メディア（翻訳者）間に見られる相違であるが、「情報の付加」のシフトの出現延べ数が最も多かったのは、日経新聞、朝日新聞、ソニーミュージックであり、出現回数が多いほど、より幅広い目標読者の理解を補う効果が期待できると思われる。新聞と音楽情報サイトというカテゴリーに分類して比較してみると、日経新聞と朝日新聞の間では

付加された情報の内容は異なるものの出現回数に差異はなかった。音楽情報サイトのソニーミュージック、Rolling Stone Japan、BARKS の間では出現回数も付加された情報の内容にも差異が見られた。このことから、情報提供を主たる目的とする新聞が、音楽情報サイトと比較して、テクスト・レベルでもより幅広い目標読者の理解を補う方略を選択していると思われる。また、新聞が一般購読者を目標読者に設定し、音楽情報サイトがディランファンや音楽ファンを目標読者に設定していることを踏まえると、音楽情報サイトの目標読者がより限定的であることが、翻訳者のシフトの選択に影響していると思われる。

5.2 カズオ・イシグロのノーベル文学賞受賞スピーチ

カズオ・イシグロは長崎県出身の日系イギリス人小説家であり、スピーチの中でも生まれ故郷である長崎が原爆投下により壊滅的被害を受けたことや、日本の伝統的な「畳」に触れるなど、日本人には比較的理解しやすい内容となっている。このため、日本の目標読者の理解を補うための方略は、ボブ・ディランのスピーチと比較すると少ないと思われる。カズオ・イシグロのスピーチの特徴は、序論では生まれ故郷の長崎にいた 5 歳の頃を振り返り、本論では、今日の世界の状況が民族間で分裂し敵対する時代にあり、「平和」を願って創設されたノーベル賞が我々に何のために闘うべきかを思い起こさせてくれると述べており、結論では序論にある 5 歳の時の彼と今ここ（2017 年 12 月 10 日に開かれたノーベル賞授賞式）に立っている彼を、時間的・空間的に対比あるいは移動させていることである。したがって、Reiss の 3 分類のテクスト・タイプの内の「表現型テクスト」に属すると仮定して、翻訳シフトを抽出し分析を行った。「表現型テクスト」は内容を類似した芸術的構成で伝えることが重要となる。

また、テクスト全体では、“the Nobel Sho” を一貫して使用するのではなく、“the Nobel Sho” と “the Nobel Prize” を使い分けることによって、時間や空間、ひいては異文化間の移動を表現していると思われる。具体的には、“the Nobel Sho” は、カズオ・イシグロが 5 歳の時、長崎にいたことを暗示し、“the Nobel Prize” は、カズオ・イシグロが今ここ（2017 年 12 月 10 日に開かれたノーベル賞授賞式）にいることを暗示していると思われる。

5 歳の時の彼と、今ここ（2017 年 12 月 10 日に開かれたノーベル賞授賞式）に立っている彼を、時間的・空間的に対比あるいは移動させている結論の原文と、それに対応する各訳文は以下の通りである。また、起点テクスト（ST）と目標テクスト（TT）中の下線は、時間的・空間的移動が観察される箇所を示すために筆者が書き加えたものである。

表１　カズオ・イシグロのスピーチの翻訳比較

	ST	TT（朝日新聞）	TT（毎日新聞）
19	I am happy to receive the Nobel Sho, as I instinctively called it when, minutes after receiving my astounding news I telephoned my mother, now 91 years old.	驚きのニュースを受け取った数分後、91歳となる母に電話をかけた際、自分でも気づかないうちにそう呼んでいたように、「ノーベルショウ」を受けたことを、たいへんに幸せに思っています。	私は受賞の知らせを受けて直感的に、「のーべるしょう」と声に出し、その直後に、いま91歳の母親に電話しました。
20	I more or less grasped its meaning back then in Nagasaki, and I believe I do so now.	ノーベル賞というものが持つ意味を、幼かったあの日の長崎で直感的に悟ったのと同じように、自分が今この賞の精神を理解できていると信じています。	私は長崎にいた時、既に多少なりとも賞の意味を理解しており、今も理解していると思っています。
21	I stand here awed that I've been allowed to become part of its story.	そしてその歴史の一つに連なることを許されたことに、畏怖（いふ）の念を感じながらここに立っています。	ここに立って、その歴史の一部になることを許されたことに感動しております。
22	Thank you.	ありがとうございました。	ありがとうございます。

まず、センテンス№19であるが、STの“the Nobel Sho”が長崎にいた5歳のカズオ・イシグロを暗示していると思われる。朝日新聞と毎日新聞の訳出はそれぞれ、「ノーベルショウ」と「のーべるしょう」になっており、片仮名と平仮名の違いはあるが、ともに音訳が採用されている。これは異文化要素の訳出などで採用される方略だと思われる。次に、センテンス№20では、STの“back then in Nagasaki”が朝日新聞と毎日新聞ではそれぞれ、「幼かったあの日の長崎で」と「長崎にいた時」に訳出されている。朝日新聞の訳出では、詳述の方略が採用されていると思われる。これは文を完結させるために付加を伴うST項目の説明である。また、毎日新聞の訳出では、言語構造の差異を克服するために句構造が変化した必然的（義務的）なシフトであると思われる。同じくセンテンス№20のSTの“now”は、朝日新聞と毎日新聞ともに、「今」と訳出され、シフトは観察されなかった。さらに、センテンス№21では、STの“here”が、朝日新聞と毎日新聞ともに、「ここに」と訳出され、シフトは観察されなかった。センテンス№19か

らNo.21にかけて、長崎にいた5歳のカズオ・イシグロが、今ここ（2017年12月10日に開かれたノーベル賞授賞式）に立っている彼へと、時間的・空間的に移動していることが窺える。

朝日新聞と毎日新聞は、ともに目標読者を一般の新聞購読者に設定していると思われるが、ここで両者の方略の違いと読者に与える効果や影響について考察する。まず、センテンス№19であるが、朝日新聞は「ノーベルショウ」と片仮名語になっている。片仮名語とは、広辞苑第六版（2008）によると、「ふつう片仮名で表記する。主に欧米から入ってきた外来語。日本で外来語を模してつくられた語にもいう。」とされている。このことから、「ノーベルショウ」は外来語として表記され、外来語が持つ印象を読者に与えると思われる。また、毎日新聞は「のーべるしょう」と平仮名になっているため、5歳の子どもの頃のカズオ・イシグロを想像させるかもしれない。これらの表記は、テクスト全体で見ても統一されている。また、センテンス№20であるが、朝日新聞と毎日新聞ではそれぞれ、「幼かったあの日の長崎で」と「長崎にいた時」となっている。朝日新聞の「幼かったあの日の長崎で」は、文を完結させるために付加を伴ったST項目の説明である「詳述」の方略と同定したが、「幼かった」が付加に相当すると思われる。これにより、STの“back then in Nagasaki”の暗示的意味が明示化され、目標読者により理解されやすくなっていると思われる。

また、テクスト全体としては、ボブ・ディランのスピーチの翻訳では、英語と日本語の姓名の表記の違いや文学に馴染みのない音楽ファンも視野に入れた社会文化的差異を克服するためのシフト（方略）が選択され、内容伝達に価値が置かれるのに対して、カズオ・イシグロのスピーチは、内容を類似した芸術的構成で伝えることが重要となる「表現型テクスト」寄りであると思われる。

6 分析結果と考察

ここでは分析から得られた結果に基づいて、ノーベル文学賞受賞スピーチの英日翻訳の訳出志向と方略選択に関わる考察を踏まえ、先に挙げたリサーチクエスチョンに対し回答していく。

(1) 言語機能や目標テクストの目的、目標読者層などが、どのような翻訳シフトを生じさせているのだろうか。

まず、ノーベル文学賞受賞スピーチは、Reiss（1977/1989）が提示しているテクスト・タイプ（情報型・表現型・効力型）のちょうど中間に位置する“official speech”（「公式

演説」）にあたるため、スピーチの内容によってテクスト・タイプは変容する。また、メディアによって目標読者層は変わる。「情報型テクスト」寄りのボブ・ディランのスピーチでは、目標読者の理解を補うことを目的とする「情報の付加」のシフトが観察された。「情報の付加」のシフトは原文にない情報を訳文で付加しているため、翻訳者の判断による任意的なシフトである。また、社会文化的差異を克服するために翻訳者により選択された（任意的な）「情報の付加」のシフト（方略）も観察された。

「表現型テクスト」寄りのカズオ・イシグロのスピーチでは、「音訳」や「詳述」などのシフト（方略）が観察された。「音訳」は異文化要素の訳出に採用される方略であり、「詳述」は文を完結させるために付加を伴う ST 項目の説明である。

(2)（1）について、各メディア（翻訳者）間でどのような違いがあるのだろうか。

目標読者層や翻訳の目的などが各メディア間で異なり、この違いが翻訳者によるシフト（方略）の選択に影響を与えていると思われる。「情報の付加」のシフトが観察されたボブ・ディランのスピーチの翻訳では、新聞と音楽情報サイトを比較すると、新聞の方が「情報の付加」のシフトがより多く見られた。これは新聞が情報提供を主たる目的とすることによると思われる。また、音楽情報サイトの目標読者がディランファンや音楽ファンに設定していると思われることから、目標読者がより限定的であることが、翻訳者のシフトの選択に影響を与えていると思われる。付加された情報の内容については、目的を同じとする新聞の間でも相違が見られた。音楽情報サイトの間でも同様に相違が見られた。

また、カズオ・イシグロのスピーチの翻訳では、情報提供を主たる目的とする点や目標読者層では、朝日新聞と毎日新聞は同じであるが、翻訳者の判断による（任意的な）シフト（方略）の選択では相違が見られた。だが、テクスト全体では、英語と日本語のテクスト構造の相違から生じる必然的なシフトが多く観察され、比較的原文に忠実な翻訳スタイルが採用されていると思われる。これは、カズオ・イシグロのスピーチが内容を類似した芸術的構成で伝えることが重要となる「表現型テクスト」寄りのテクスト・タイプに属するためだと思われる。

(3) 翻訳者が選択した翻訳方略が目標読者に効果や影響を与えているとしたら、それはどのようなものだろうか。

「情報型テクスト」寄りのボブ・ディランのスピーチの翻訳では、新聞と音楽情報サ

イト間で比較すると、新聞の方がより幅広い読者層を目標読者に設定していることから、「情報の付加」のシフトがより幅広い読者層の理解を補う効果をもたらしていると思われる。「表現型テクスト」寄りのカズオ・イシグロのスピーチの翻訳では、カズオ・イシグロが長崎県出身の日系イギリス人小説家であることから、日本人には比較的理解しやすい内容となっているため、日本の目標読者の理解を補うための方略よりも芸術的構成を保持するための方略が選択されていると思われる。だが、“the Nobel Sho” や “heiwa” といった日本語で表現することによって、時間や空間、ひいては異文化間の移動などを表現しようとした彼の意図が、“heiwa” の訳の表記が毎日新聞と朝日新聞ともに不統一であるなど、読者に伝えきれていない箇所も見られた。

7 今後の課題

本稿では、新聞や音楽情報サイトが提供するノーベル文学賞受賞スピーチの英日翻訳を分析対象とし、どのような翻訳方略を用いて訳出されているかについて検証した。社会的なものである世界の文学への入り口として、ノーベル文学賞受賞スピーチの英日翻訳が担う役割は大きく、テクスト・タイプ（情報型・表現型・効力型）の変容性や翻訳の目的（スコポス）が、どのようなシフト（方略）を翻訳者に選択させ、日本の目標読者に効果や影響をもたらすかについて考察したことは重要であると思われる。また、スピーチの翻訳が世界文学と目標読者をつなぐという意味での社会的行為であり、本研究はノーベル文学賞受賞スピーチの英日翻訳の進展に資すると考える。だが、本研究が分析の対象としたのは、2016 年、2017 年と比較的最近のボブ・ディランとカズオ・イシグロのスピーチのみであり、本稿での結果をもって一般化することはできない。今後さらに、ノーベル文学賞受賞スピーチの英日翻訳を分析対象にして、翻訳を社会行為として捉えた社会等価的側面から見た翻訳シフト分析を行っていく。

参考文献

朝日新聞デジタル（2017 年 10 月 5 日 20 時 29 分）ノーベル文学賞にカズオ・イシグロ氏　英国の小説家［Online］
（https://www.asahi.com/articles/ASKB56RPCKB5UCLV019.html）.

河原清志（2017）.『翻訳等価再考　翻訳の言語・社会・思想』晃洋書房.

新村出編（2008）.『広辞苑　第六版』岩波書店.

日本経済新聞（2017 年 10 月 5 日 22 時 44 分）ノーベル文学賞にカズオ・イシグロ氏「日の名残り」［Online］
（https://www.nikkei.com/article/DGXMZO21959160V01C17A0MM8000/）.

ライス, K., フェアメーア, J.H.,（2019）.『スコポス理論とテクストタイプ別翻訳理論－一般翻訳理論の基礎―』（藤濤文子・監訳）晃洋書房.

Blum-Kulka, S. (2004). *Shifts of cohesion and coherence in translation*. In L. Venuti (Ed.) *The translation studies reader* (2nd ed.) (pp. 290-306). London & New York: Routledge.

Catford, J.C. (1965). *A linguistic theory of translation an essay in applied linguistics*. London: Oxford University Press.

Chesterman, A. (2016). *Memes of translation: The spread of ideas in translation theory*. Amsterdam: John Benjamins.

Munday, J. (2008/2012/2016). *Introduction to translation studies: Theories and Applications*. London/New York: Routledge.（鳥飼玖美子監訳（2009）『翻訳学入門』みすず書房）.

Newmark, P. (1981). *Approaches to translation*. Oxford & New York: Pergamon.

Reiss, K. (1977/1989). *"Text types, translation types and translation assessment"*, translated by A. Chesterman, in A. Chesterman (ed) *Readings in Translation Theory*. Helsinki: Finn Lectura.

Venuti, L. (1995). *The translator's invisibility: A history of translation*. London & New York: Routledge.

Vinay, J.-P. & Darbelnet, J. (1958). *Stylistique comparée du français et de l'anglais. Paris: Didier*. translated and edited into English by Sager, J.C. & Hamel, M.J. (1995). *Comparative stylistics of French and English: A methodology for translation*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

分析資料

日経新聞　ディランさん「創造的努力、シェークスピアのように」ノーベル賞受賞スピーチ（日本語訳全文）2016 年 12 月 11 日 16:27（https://www.nikkei.com/article/DGXLAS0040006_R11C16A2000000/）.

朝日新聞 「シェークスピアが浮かんだ」ディラン氏スピーチ全文　2016 年 12 月 11 日 17:45（https://www.asahi.com/articles/ASJDC2VT1JDCUHBI002.html）.

ソニーミュージック　ボブ・ディラン：ノーベル賞受賞スピーチ全文訳 （アジタ・ラジ　駐スウェーデン米国大使　代読） 2016 年 12 月 11 日（https://www.sonymusic.co.jp/artist/BobDylan/info/476477）.

Rolling Stone Japan　全文掲載｜ボブ・ディランのノーベル文学賞の受賞スピーチ 2016

年 12 月 12 日 11:30（https://rollingstonejapan.com/articles/detail/27267/2/1/1）.
BARKS ボブ・ディラン、ノーベル賞晩餐会で代読されたスピーチ全文 2016 年 12 月 11 日 15:47（https://www.barks.jp/news/?id=1000135939）.
朝日新聞 「ノーベルショウ」イシグロさんに刻まれた母の日本語　2017 年 12 月 11 日 12:29（https://www.asahi.com/articles/ASKDC3F2GKDCUCLV002.html）.
毎日新聞　ノーベル文学賞イシグロさん記念スピーチ　全文 2017 年 12 月 11 日 13:04（https://mainichi.jp/articles/20171211/k00/00e/040/177000c?_ga=2.256871874.890412340.1570868653-1870009007.1545915911）.